

【書評】秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』（二〇一四年、法政大学出版局）ハイデガーとの新たな「対決」のために

TAKAYASHIKI, Naohiro / 高屋敷, 直広

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

2016-03-20

【書評】

秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』(二〇一四年、法政大学出版局)

ハイデガーとの新たな「対決」のために

高屋敷 直 広

「果たしてハイデガー哲学は本当に必要なのか」。二〇世紀最大の哲学者と評されてきたマルティン・ハイデガーの存在の思索に対し、今再び、こうした深刻な疑義が呈されている。本書はその渦中で、思索の真髄を見極めるための珠玉の手引きである。

本書ではハイデガーの「思索の道」が前期・中期・後期の三部に緩やかに区分され、従来の研究成果の上に全三三編もの優れた論考が展開されている。周知の通り、ハイデガー哲学の解説書類はわが国にも多数存在する。だが本書の最大の特徴は、解説的な役割と最新の専門的な研究成果とが見事に両立している点である。すなわち、難解な論旨や術語が明確に整理されるとともに、「転回」や中後期の諸問題への思索全体を見据えた新しい知見が得られる。そ

れ故、本書は必読の研究書とも言うべきである。

第一部では、初期や前期の思索、特にアリストテレス・カント・現象学との関係を背景に『存在と時間』が丁寧に読解される。その中で、主著の挫折および転回に関し、時間性とテンポラリテートの精緻な対比に基づき、従来以上に説得力のある解答が得られる。第二部では、ニヒリズムとの対決や政治関与といった難題に触れつつ、メタ存在論や形而上学の段階を経て複雑に移行する中期固有の思索が解明される。その際中心的な役割を担うテキストは、『哲学への寄与』である。第三部では、より深化する晦渋な思索の射程が「神秘的」な様相を超えて論じられる。技術や西洋思想全体への批判は勿論だが、ここでは特に、詩や古代ギリシアの箴言と共鳴し合う「言葉」が「別の元初」の

到来に向けて持つ重要性が、理解されうる。以上の連関の内で、思索の事柄が多角的に光を当てられることにより、読者の精確な理解が可能となるはずである。

さらに特筆すべきなのが、第一に、「付録」において、膨大な巻数に亘る『ハイデガー全集』の解題に成功している点であり、各要点を容易に確認できる様は圧巻である。そして第二に、全集における『黒ノート』の編者P・トラヴニーの寄稿を通じ、反ユダヤ主義的文言を孕むこの書の評価を国内でいち早く問うた点である。

冒頭で触れたハイデガーを巡る情況の変動は、この『黒ノート』の出現による。存在の思索に対する批判とそれへの応答を建設的に試みるためにも、本書が読者を有意義な「対決」へと導くことが、期待されるであろう。